

観光が地域に与える影響と博物館の役割

—アイヌ文化に関わる事例を中心として—

若園 雄志郎

序

本稿では博物館⁽¹⁾と観光の関係について考察を行う。観光とは余暇利用として、または学校や組織の活動の一環として自らが居住・生活している地域を離れ他地域の文化や景観に触れる機会である。これに加え、橋本和也は「今日的な問題を明確にする」ために「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」⁽²⁾と定義した。すなわち観光とはその地域の構成要素の一部を見るものであり、そこには経済活動を抜きには語るができないのである。

そもそも博物館は来館者⁽³⁾が目的地の歴史や文化を短時間で概観できるため観光としての対象としても選定されやすい。博物館は社会教育施設としての機能や研究機関としての機能を持っている。しかしこれだけには留まらず、まちづくり・地域おこしの一環としての機能も併せ持っている。それは博物館を利用する機会の一つとして旅先での訪問が挙げられるためである。

観光を捉える視点は様々であり、個人的な余暇活動や行動に焦点をあてたもの、経済的効果や社会現象として捉えるもの、また文化現象として捉えるものがある。特に文化現象としての視点からは主に人類学・民族学の分野においての研究⁽⁴⁾が数多くなされている。さらに近年関心が高まっている行政評価の対象として博物館も例外ではなく、博物館評価の流れに呼応して博物館運営という視点から来館者の満足度を高めてより多くの人に利用してもらうために観光を位置づける研究⁽⁵⁾もなされている。観光の目的地として博物館が選定されているという現状があるにもかかわらず、観光と博物館の関係についての研究は非常に少ない。そこで、前述の博物館評価により来館者数の確保が急務となっている現状の中で、そのような数値目標のみではなく、当該地域外からの来館者が文化に対して与える影響についての研究は重要であると考えられる。

本稿では観光が地域や民族の文化に与える影響、特に来館者・来訪者の存在がどのような影響を及ぼすのかという視点から博物館の位置づけを探ってゆく。またアイヌ民族を扱った博物館における多文化教育に関する筆者の研究の一環であるため、北海道のアイヌ民族に関わる事例を用いながら考察を行う。1では観光という活動が地域住民や民族の文化にどのような影響を与えるかを検討する。観光が文化に与える影響はその状況や時代によって変化すると考えられるが、観光により文化が形骸化から発展へ、そして訪れる側を含んだ共同意識へと変化していったことについて理論的な流れを整理

し、北海道の阿寒湖畔⁽⁶⁾で開催されている「まりも祭り」⁽⁷⁾の事例を加えながら述べる。「まりも祭り」は伝統文化を新たに解釈し文化の創造を行った事例として、地域の発展や阿寒湖畔のアイヌ文化に「決定的な影響を与えたもの」⁽⁸⁾だからである。2では博物館が観光の目的地として選定されている現状から、観光における博物館の役割について考察する。これまでの博物館における観光の位置づけを振り返り、観光について明確に述べているエコミュージアムの理念についての検討を行う。また北海道平取町立アイヌ文化博物館の事例を用いて考察する。以上から観光が地域に与える影響とその中での博物館の役割を明らかにしたい。

1. 観光が地域住民・民族に与える影響

観光という活動は観光される側の文化に対する働きかけを行う。ある特定の地域・民族の文化はこの働きかけにより「意識的に操作され、政治的に取引され、観光のコンテキストにおいて演出され、消費されさえするものとして現れてくる」⁽⁹⁾ものに変容されてしまうことがある。それは博物館同様関わる者の相互作用によって双方が変容してゆくものであるといえる⁽¹⁰⁾が、観光という活動ではその変容の度合いは観光を受け入れる住民や民族の方が大きく、しばしばその地域に対して大きな影響を与える。

観光が地域に与える影響は文化的なもの・経済的なものが存在するといえるだろう。来訪者を受け入れる側にとってはその地域独自の何らかの特色を示すことで、地域外の人間にとっての魅力を準備しなくてはならない。その時におこる現象が文化の商品化である。文化の商品化の問題とは安田克己が述べたように「本来“経済財ではない”とみなされてきた文化や自然や人間などが、観光の商品という経済財として近代化（とくに資本主義経済）の趨勢に組み入れられて生じる」⁽¹¹⁾ものであるといえる。

この文化の商品化に対しては文化の形骸化とみるもの、逆に文化の発展として捉えるものといった2つの視点が存在するといえるだろう。前者はデヴィッド・J・グリーンウッド（Davydd J. Greenwood）が提示した視点であるといえる。彼はスペインの儀式「アラデー（Alarde）」についての事例研究を通して「文化はパッケージ旅行の一部になることによって、終幕を迎えて、もうかる公演となり、もはや以前のように信じられなくなる。このように文化の商品化は事実上人々の生活を組織化することにより彼らからその本当の意味を奪い去ってしまう」⁽¹²⁾と述べた。つまり観光による文化の商品化の過程は「土地や労働や資本では止まることがなく、結局は歴史や民族のアイデンティティ、そして世界中の民族文化といったものを囲い込んでいくのである」⁽¹³⁾としたように、伝統的な文化が経済の文脈に捕らわれてしまうことでその形骸化が進んでしまうとする立場である。

後者はフィリップ・フリック・マッキーン（Philip Frick McKean）がインドネシア・バリにおいて行った事例研究にみられるような立場であると考えられる。マッキーンは「保守的傾向と経済的必要性の両方が近代化の資金を得るために、彫り手、楽士、そして踊り子としての技能を保つことをバリ島の人々に促している」⁽¹⁴⁾と述べ、民族文化が経済的価値の文脈におかれることによる「観光を容

認することの危険性」⁽¹⁵⁾を指摘しつつも、「観光が彼らを引き合いに出すという鏡によって鮮明に緑取られることにより、バリ人としてのアイデンティティを見つけ出」⁽¹⁶⁾すと述べた。すなわち社会的・経済的な近代化は「伝統文化の維持と手と手を取り合って進んでい」⁽¹⁷⁾くことが十分可能であるとするものである。

同様にバリにおける事例研究において山下晋司は「観光が伝統文化を刺激し、新しい文化創造のための刺激剤になった」⁽¹⁸⁾として「民族文化を『消滅』に向かう物語としてではなく、新たな創造へといった『生成』の物語として語る」⁽¹⁹⁾視点が重要であると述べ、こちらも観光に対して積極的な考察を行っている。結果的には観光が民族文化を破壊するよりもむしろ維持することになった側面が確かに存在するといえるだろう。

このような意見の対立は文化を流動的なものとして捉えるかどうかによるものだと考えられる。すなわち観光による文化の変容をその破壊と見なすか現在における文化の姿だとするかということである。確かに歴史的に見れば、とりわけ民族と観光の関係について考える時、19世紀の民族学博物館が植民地主義を反映したものであったように、観光もまた植民地主義的な文化の表象から逃れることはできなかった。つまり政治的意図のもと文化が保護されていることを内外に示し、被支配者側に伝統的文化を維持するように求めることによって民族運動などから遠ざけようとしたのであった⁽²⁰⁾。また第二次世界大戦後に見られる観光形態に対する批判として「観光者が大挙して観光地に押し寄せるマス・ツーリズムは、(中略)豊かなゲストが貧しいホスト社会を訪れる、という南北問題の不均衡構造から成り立ち、さらにゲストの大群はホスト社会を破壊した」⁽²¹⁾と見るができるように、政治的理由による保護から、来訪者の要求するイメージに合わせることによる文化の形骸化・破壊という構造へと変化したと考えられていた。

しかし、グリーンウッドはその後論文に追加した部分（“Epilogue”）で「地元住民には説得力のない方法で地方文化を薄めていく」⁽²²⁾と観光の政治的側面について懸念を示しつつも、「観光活動は地方の文化の中に創造的な反応を発生させ、(中略)地方の文化に対する興味や地方の伝統に対する誇り、そして進歩した文化的価値観が発展するかもしれない」⁽²³⁾と観光を文化の形骸化として捉える姿勢から発展・創造として捉える姿勢へと変化させている。

文化を形骸化、または発展・創造させる、と言ったときに、それが当該住民や民族の真正な (authentic) 文化であるかどうかを判断するのはその文化の所有者たる住民や民族であろう。太田好信はこの「真正さ」について「文化の客体化」⁽²⁴⁾という概念を用いて説明し、「文化や伝統はある価値体系によって解釈された結果、はじめて『真正さ』を獲得する」とし、さらに「そのような価値体系は、その文化の担い手がつくりあげることもあれば、また、外部のものがつくりあげることもある」⁽²⁵⁾と述べた。文化の所有者たる住民や民族は彼ら自身のみで判断を行うのではなく、他者との相互の関わりの中でその判断を行ってゆくのである。

観光のために文化を創造することで民族のアイデンティティを持つようになる事例は日本においても存在する。例えば1950年から始まった北海道阿寒郡阿寒町の「まりも祭り」はまりもの保護を目

的としアイヌ民族の伝統的な儀礼の形式を取り入れた新しい祭りの創造である。そして祭りを阿寒に住むアイヌ民族と和人⁽²⁶⁾によって共同で行うことによりアイヌ民族としてのアイデンティティと阿寒町の住民としての共同意識ができあがった事例である。

当然ここには観光が文化を商品化し一面的で固定化された民族イメージを再生産しているのではないか、また民族の「真正な」文化を破壊、ないしは形骸化してしまうのではないかといった前述のような懸念も起こってくる。しかし文化を閉じた世界のものとして捉えることは「創造力を否定する新たな自民族中心主義」⁽²⁷⁾へと結びつきかねない。上述の効果を鑑みれば、この祭りは「阿寒の民族的共生関係の過程そのものであり、この関係を確認、再生産するための場となっている」⁽²⁸⁾ということができる。さらに興味深いのはこの共同意識は「観光客をも含むアイヌと和人というより広い集団への帰属性に移行する」⁽²⁹⁾という点である。観光客はこの祭りに参加することでアイヌの民族文化に触れ、観客も含めた祭りを構成する要素となっているのだ。もちろん祭りだけではなくその地域を含めての短期間の観光だけによって和人の観光客がアイヌ民族の全てを即座に受け入れることは難しい。しかし和人の来訪者にとっては少なくとも同一の居住地及び生活をしている人びとであり、異なった文化を持つ民族であるという多文化・多民族の認識が得られるようになるという側面が存在する。さらにその文化を形作っている精神的な部分に触れることができることからすれば観光は相互理解にとっても有益であるといえるのではないだろうか。

阿寒の住民としての主体性、また一方ではアイヌとしての民族アイデンティティを高めてゆくといったような効果が現れていると考えられるが、それはこれまで観光の文脈において論じられてきた文化に対する影響と同様であるといえるだろう。さらにここでは単なる参加者・傍観者としての来訪者像ではなく、その地域・民族への認識を深め共同意識を涵養してゆく効果が存在している。

観光による影響は文化の破壊・形骸化から発展・創造へ、さらには文化を担う側だけではなく外部からの来訪者が文化の多様性を認識してゆくという効果が現れている。確かに観光は商品化という経済的な要因を媒介とはしているが、結果的にはマジョリティ側におけるマイノリティ側の生活や文化に対しての認識が深まるという効果も存在しているといえるのである。

2. 観光における博物館の役割

また、日本観光協会の2000年度の調査によれば「宿泊観光旅行先での行動」として「動・植物園、水族館、博物館、美術館、郷土資料館見物」を挙げた人は全体の18.0%であり5番目に多い行動である⁽³⁰⁾。また「宿泊観光旅行先での希望行動」で上記項目を挙げた人は全体の25.5%であり、これも5番目に多い数値である⁽³¹⁾。観光の目的として博物館は充分選択され得ると考えられるだろう。

佐々木亨が1995年に網走市にある北海道立北方民族博物館で行った調査によれば北海道外からの来館者は全体の63%、また北海道内からの来館者で網走市内以外からは32%であり、特に道庁所在地である札幌及びその近郊からの来館者が多いようである⁽³²⁾。その他、筆者が聞き取り調査を行った北海道の博物館⁽³³⁾からは、正確な来館者の内訳はデータがないため不明であるものの、「観光客

は全利用者のおよそ9割、道内の中高生も多い」⁽³⁴⁾、「修学旅行の学生がバス数台で訪れる」⁽³⁵⁾といった声があった。このように地域外からの来館者が多数を占めている。このような地域外からの来館者が多数を占めている博物館は多いと考えられる。博物館が観光とも密接な関係を持っていることがいえる。

このように博物館を利用する人びとは地域の住民だけとは限らない。前述したように学校の修学旅行などでの多人数・短時間での訪問や不特定多数の地域外からの訪問が多く見られるのである。

ただし当然のことながら博物館は結果的に観光としての利用が大半を占める場合であってもそれを第一義とすることは避けなくてはならないだろう。地域における博物館はその博物館が存在する地域の住民の学習の場である。そこでここではまず伊藤寿朗の「地域博物館論」における観光の関係性について着目する。博物館における市民参加の重要性を論じた伊藤寿朗は博物館を三つの型、すなわち地域志向型・中央志向型・観光志向型に分類した。実際の博物館ではこれら三つの型が同居していることが多いということは伊藤も認めているが、この中で「観光指向型」とは希少価値を重視し資料の持つ意外性を中心としたものであるとしていた⁽³⁶⁾。しかしながらこの類型化は現在の観光と博物館の関係を勘案すると、もう一度振り返る必要があるだろう。

現実的には地域の特徴的な文化や歴史、または自分たちとは異なった文化背景を持つ民族を扱った博物館は、観光の場において来館者の求める意外性や希少性、またはその地域の文化や歴史に対する知的欲求といった動機付けによる集客能力を持つ。伊藤は観光指向型では「市民や利用者からのフィードバックを求めない」⁽³⁷⁾としていたが、観光という活動が前述のように相互の文化に対して好むと好まざるとに関わらず影響を及ぼすことを考えれば、仮に観光指向型であっても「フィードバック」は存在する。もちろん前述した通り、第一義としなくてはならないのは当該地域に居住する住民であり、純粋な観光指向型になるのは避けるべきである。

地域に存在する課題として住民や民族の主体性についての課題が存在しており、それに取り組むために地域住民によって博物館をつくりあげる必要があり、また来館者の多数が観光によるものならば、観光を前提とした地域指向型が最も現実的なのではないかと考えられる。特にマイノリティである民族の文化や歴史に関する展示が行われている場合、それは地域のみの問題ではなくその国に居住している全ての国民が共有しなくてはならない問題である。そのため観光地にある博物館は常に不特定多数の観光客のまなざしを意識しなくてはならないだろう。

さらに伊藤は観光客を対象にした博物館を「一過性の利用に甘んじ」⁽³⁸⁾ているものとしたように、現実的に観光による来館者が多数を占め、それ故に一過性にならざるを得ない部分が存在してしまうだろう。すなわち観光による来館者と住民や民族を繋ぐ媒介としての博物館の役割を深める必要があるといえる。来館者に対して地域や民族の文化をどのように提示してゆくかをその所有者が常に検討しなくてはならないと考えられる。そこには川森博司が観光における文化を育て上げるには「地元の人々が観光の文脈に接触しながら試行錯誤していく、時間をかけた『学習の過程』が必要とされる」⁽³⁹⁾としたように意識的な活動を行わなくてはならず、当該地域の住民や民族とともに博物館をつくりあ

げることによってそのような活動を行うことが可能となるだろう。

これを踏まえ⁽⁴⁰⁾ 実践として博物館の中でも観光活動を前面に押し出し、地域の歴史や文化を扱ったものとしてエコミュージアムという形態がある。これはフランスで生まれた概念であるが、近年日本においても地域社会の発展、及び環境保全を主眼とした博物館の一形態として発展しつつあり、しばしば「新しい博物館」といった表現をされる。しかしエコミュージアムは「新しい博物館」というよりは「博物館の新しい機能」であると考えられ、一般的な博物館がその理念を取り入れてゆくことが必要であることは別稿にて述べたとおりである⁽⁴¹⁾。

前節においてマッキーンが「鏡」として観光を表現したことは興味深い。それはICOM 永久顧問のジョルジュ・アンリ・リヴィエール（Georges Henri Rivière）がエコミュージアムを理念化する際にも同様に「鏡」という語句を使用していたためである。

リヴィエールは「エコミュージアムの発展的定義」⁽⁴²⁾ において、エコミュージアムとは「鏡」、「人間と自然の表現」、「時間の表現」、「空間の解釈」、「研究所」、「保存機関」、「学校」という語句を用いて説明している。ここで「鏡」とはエコミュージアムを通じて「住民の姿そのもの」⁽⁴³⁾ が映し出され明らかとなるものだと述べている。その「住民の姿」は「その土地に関わる、または関わった人々を解釈する」⁽⁴⁴⁾ ことで認識することができるが、解釈する主体に関して当該地域の住民同士だけではなく、来訪者に対してもその地域への認識を深めてもらうことへの言及も行っている。来訪者に対しても積極的な働きかけを行うことで一方通行の文化の提示に留まらず、その活動を通じて自らの文化や歴史を見つめ直すことで相互に認識を深めることがここで示された「鏡」の持つ機能であると考えられるだろう。

日本におけるエコミュージアムは環境に対する問題意識などに加え、まちづくり・地域おこしといった経済的効果や地域の主体性に対する効果を期待して整備される事例が多い。しかしながら博物館が全ての文化を物理的に表象できない以上、一定の価値判断に基づく取捨選択が行われることになる。そのため博物館においては提示される文化とされない文化が峻別されることになるのである。

ここにおいても太田が述べた「文化の客体化」が行われていると見ることができるだろう。すなわちその峻別の行為は当該地域の住民やテーマとなる民族自身といった文化を所有するものが主体的に行うべきであるが、観光と関連する時、所有者以外の他者からの視線を常に考慮せざるを得ない。一過性の来館者に対して優先的に伝達したいことを整理し、焦点を絞った活動を行う必要があるのである。

対象をアイヌ民族に限ってみると北海道における数多くのアイヌ観光地⁽⁴⁵⁾ はそこで販売されている観光土産やアトラクションとしての舞踊などを通じてアイヌ民族に対する固定的なイメージを形作ってしまった。これによって「アイヌイメージの定着と虚像の肥大化現象」⁽⁴⁶⁾ が起こってしまっているのだといえる。このようなイメージからでは民族の姿を正しく認識することはできない。博物館ではこのようなイメージが観光の文脈における取捨選択が行われた結果表現されており、時には創造されてきたものであることを来館者に対して伝達しなくてはならないだろう。これまでどのよう

な経過をたどって現在のアイヌ民族のおかれている状況が生まれたのか、またアイヌ文化の提示だけに留まらず現在を生きるアイヌ民族自体についても認識することができるような内容としなくてはならないだろう。つまりアイヌ民族自身が提示する歴史の中で連続性を持った文化が背景に存在した上での現在の解釈の結果であることを示さなくてはならないと考えられる。

またこれに加え、固定化したイメージに対して文化の所有者が真正であると解釈した文化の姿を提示するのが博物館やその地域全体の役割なのではないだろうか。観光が民族を商品化する部分が存在してしまうことは確かに否定できないが、不特定多数に対して異文化を提示することで広く民族や住民の存在を表明できる機会だと捉える視点が求められる。

例えば木彫はアイヌ文化の工芸のうちで大きな比重を占める分野の一つであるが、この木彫に関する展示としては平取町立二風谷アイヌ文化博物館では特別展として何度か開催し、他方国立民族学博物館（民博）においても国際先住民年を記念した「アイヌモシリ」展が開催された。この民博の展覧会は1994年に北海道ウタリ協会が初めて取り組んだ本格的な展覧会事業である「ビョカノカ」展の開催へと繋がっていった。これら展示企画は古い資料の公開に留まらず、現在も制作活動を行っている工芸作家たちの作品を伝統を踏襲しながらも現代的な適応と創造を試みたものとして肯定的に評価し、推奨しようとする立場で共通していたといえる。すなわち住民の文化に対する危機意識を背景として、これまで来訪者に対する工芸品であったものを博物館の場において文化の一部を構成するものとして提示することで、現代の文化の一端を来館者に伝達する試みであったのである。

このような活動が十分な準備と議論の元で行われるのであれば、地域、ないしは民族文化を的確に伝達することは可能であろう。しかしながら単に来館者数確保や経済的効果を期待した戦略の一環として位置づけられてしまえば博物館もまた観光による文化の形骸化という事態から逃れることはできなくなってしまう。

不特定多数、そしてその居住地も様々である観光客の展示に対する理解度をデータ化し今後の展示に役立つような展示評価を下すことは困難である。展示を見終わったのちにアンケートをとる、聞き取り調査を行うといった方法も時間的に余裕のない観光客に対しては協力を得にくいだろう。そのため観光による来館者からの展示評価を得ることは難しいと考えられるが、修学旅行などといった居住地域の明らかなある一定の集団に対しては日時を改めて調査を行うことは十分可能である。その学校との事前・事後の連携を行ってゆくことにより訪れた側からの評価を行いながら柔軟な展示改訂を行ってゆくことも「観光指向型」に留まらない博物館をつくりあげてゆく活動の一つではないかと考えられる。

結

本稿では観光における文化の変遷をめぐる議論と、そこに博物館がどのような役割を果たしうることについて考察を加えてきた。1ではまず観光をめぐる二つの立場を検討した。一つは伝統的な文化が経済の文脈に捕らわれてしまうことによる文化の形骸化を危惧するものであり、もう一つは文化が

発展と新たな創造へと至るとするものであった。ここでは文化を流動的に捉えるかどうか、そしてその文化が真正であるかどうかを誰が判断するのが焦点となっていた。その判断は文化の所有者たる住民や民族が行うものであるものの、彼ら自身のみではなく、他者との相互の関わりの中でその判断を行ってゆくのである。また事例として北海道阿寒町の「まりも祭り」を取り上げた。そこには阿寒の住民としての主体性、一方ではアイヌとしての民族アイデンティティを高めてゆくだけでなく、来訪者自身もその地域・民族への多様性への認識を深め共同意識を涵養してゆく効果が存在している。

2では博物館が現実的には地域住民よりも外部からの来館者の訪問が多いことを受け、伊藤寿朗による類型化を振り返り、観光の文脈における博物館の役割について考察を行った。観光による来訪者と住民や民族を繋ぐ媒介として博物館は重要な役割を持っており、来館者に対して文化の所有者たる住民・民族が選択した文化をそこにおいてどのように提示してゆくかを当該地域の住民・民族自身が検討してゆかなくてはならないだろう。また観光について明確に定義されているといえるエコミュージアムにおいては、選択した文化をまちづくりに活かしてゆくことで来訪者を惹き付け、その選択する過程と来訪者からの働きかけによって自らの文化を見つめ直す活動が行われている。しかし観光における選択された文化の提示はイメージの固定化などの弊害を生む。そのためには博物館は選択されている文化がどのような背景を持っているのか、また選択されなかった文化についても言及を行うことが必要であると考えられる。

観光における博物館の役割は、不特定多数の来館者がその地域の文化に対して認識する契機となるだけでなく、発展・創出された文化に対する議論を深め、その文化がどのような背景の元に選択され変化してきたのかを提示することでもある。また従来からの博物館の機能として持っている保存・研究機能を生かしその文化の変遷を記録し調査も引き続き併せて行うことで、観光における地域文化を改めて住民自身が位置づけることが可能となるだろう。

観光とは地域や民族のアイデンティティに対し働きかけ影響を及ぼすが、それはアイデンティティ確認のための一手段に過ぎない。観光における文化の発展・創造は確かに存在するもののそれは文化の総体ではない。それ故に地域住民・民族、さらに来訪者はそれぞれが観光における文化が限定されたものであることを認識してゆかなければならないのである。相互の仲介をし、総体的な認識を深める装置として博物館はその地域において必要とされているのである。

博物館を取り巻く状況は依然として厳しい。市町村の統合や指定管理者制度による民間企業の参入といった博物館に限らず社会教育全体に影響を及ぼすであろう状況が現在もなお進行中である。経済的效果と観光という活動とは直接的に結びつくものであり、数値に表れる効果のみがそのような状況の中で期待されがちではある。しかし博物館は経済的な視点だけではなく、地域の住民や民族の文化・歴史に対してもそれと同等の視点による検討を行わなくてはならない。このことを踏まえた上で経済・社会的効果を総合的に判断し、観光を目的ではなく手段として活用してゆく視点が必要であると考えられる。今後の課題としては以上をもとに博物館と観光の関係について実地調査を行ってゆきたい。

- 注(1) 一般的に博物館には歴史や文化などについての活動を行う博物館だけではなく、資料館や文書館、また動植物園・美術館なども含まれるが、本稿では主に地域の歴史や文化などを扱った博物館に対する考察を加える。
- (2) 橋本和也『観光人類学の戦略 ―文化の売り方・売られ方―』世界思想社, 1999, p. 55。
- (3) 文中で「来館者」とは博物館を訪れる人, 「来訪者」とは博物館を含めたその地域全体を訪れる人を指す。また、エコミュージアムについてはその特色である「特定のエリアを持たない」という理念を受け「来訪者」とした。このほかに「観光者」, あるいは「ゲスト/ホスト」という用語があるが、本稿では博物館の役割を考察することが目的であるため, 「来館者」「来訪者」とした。ただし, 引用文中ではその他の用語が使用されていても表記通りとした。
- (4) 太田好信「文化の客体化 ―観光をとおした文化とアイデンティティの創造―」(『民族学研究』57(4), 日本民族学会, 1993, p. 383-408), 山下晋司『観光人類学』(新曜社, 1996), 橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』(世界思想社, 2003) など。
- (5) 佐々木, 前掲論文の他, 前田勇「観光学からみたミュージアム」(『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第6号, 日本ミュージアム・マネジメント学会(JMMA), 2002, pp. 1-14) など。
- (6) もともと阿寒湖畔は「今のような大きな集落はなかったが, 観光が盛んになるにつれ, 工芸品販売や写真, 歌や踊りなどアイヌ文化への需要が増え, 人口も増えるに至った」(齋藤玲子「阿寒湖畔とアイヌ文化に関する研究ノート」(『北海道立北方民族博物館研究紀要』第8号, 北海道立北方民族博物館, 1999, pp. 111-124), p. 112) 地域であり, 阿寒国立公園や阿寒湖畔の阿寒湖アイヌコタンの整備とともに発展してきた。
- (7) 「まりも祭り」に関する詳細な内容は, 上野昌之「アイヌ文化の振興に関する考察 ―阿寒湖アイヌコタンの事例を中心に―」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊8号-2, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2001, pp. 37-47), 煎本孝「まりも祭りの創造 ―アイヌの帰属性と民族的共生―」(『民族学研究』66(3), 日本民族学会, 2001, p. 321-343) を参照のこと。
- (8) 上野, 前掲, p. 41。
- (9) 山下編, 前掲, p. 6。
- (10) 拙稿「博物館における多文化教育活動に関する考察 ―北海道開拓記念館の事例を通して―」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊11号-2, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2004, pp. 201-211)。
- (11) 安村克己「文化観光における真正性と商品化の問題」(徳久球雄, 塚本圭一, 朝水宗彦編『地域・観光・文化』嵯峨野書院, 2001, pp. 31-49), p. 41。
- (12) Greenwood, Davydd J. “Culture by the pound: an anthropological perspective on tourism as cultural commoditization” in *Hosts and Guests: the anthropology of tourism*, ed. by Smith, Valene L., 2nd ed. (pbk.), Philadelphia: University of Pennsylvania Press, c1989, pp. 171-185, p. 179. これは「観光という現象を人類学の立場からとらえた最初の論集」(川森博司「現代日本における観光と地域社会 ―ふるさと観光の担い手たち―」(『民族学研究』66(1), 日本民族学会, 2001, p. 68-84), p. 69) である。
- (13) *Ibid.*
- (14) McKean, Philip Frick “Towards a theological analysis of tourism: economic dualism and cultural involution in Bali” in *ibid.*, pp. 119-138, p. 126.
- (15) *Ibid.*, p. 132.
- (16) *Ibid.*
- (17) *Ibid.*, p. 120.
- (18) 山下晋司「『楽園』の創造 ―バリにおける観光と伝統の再構築」(山下編, 前掲, p. 104-112), p. 109。
- (19) 同上, p. 111。
- (20) 永渕康之「観光=植民地主義のたくらみ ―1920年代のバリから」(山下編, 前掲, p. 35-43)。
- (21) 安村, 前掲, p. 33。
- (22) Greenwood, *op. cit.*, p. 184.

- (23) *Ibid.*, pp. 184-185.
- (24) 太田, 前掲, p. 391。太田によれば客体化によって生まれた文化要素, すなわち他者に提示するために選択された要素は意識的につくりだされたものであるが, それが真正かどうかは現在生きている人々に委ねられる, としている。
- (25) 同上。
- (26) アイヌ民族ではない元来本州以南に居住してきた日本人を便宜的にこのように呼称する。
- (27) 太田, 前掲, p. 386。
- (28) 同上, p. 341。
- (29) 同上, p. 340。
- (30) 日本観光協会編『平成12年度観光の実態と志向・第19回国人の観光に関する動向調査』日本観光協会, 2001, p. 5。調査によれば最も多い行動は1位から順に「温泉浴」(51.3%), 「自然の風景を見る」(49.4%), 「名所・旧跡を見る」(31.7%), 「特産品等飲食買物」(28.7%)であった(回答は複数回答)。6位以降の項目としては順に「ドライブ」, 「レジャーランドなど」, 「季節の花見」, 「神仏詣」, 「登山・ハイキング」となっていた。
- (31) 同上, p. 7。調査結果での上位5項目の順位は「宿泊観光旅行先での行動」と同じであった(それぞれ71.2%, 62.4%, 41.4%, 29.8%)。また1994年の総理府調査では旅行先での希望目的として「史跡・文化財・博物館・美術館などを鑑賞する」が33.4%で, 5番目に多い数値であった(総理府編『観光白書』平成7年度版, 大蔵省印刷局, 1995, p. 37。この項目がある最新版である)。
- (32) 佐々木亨「ミュージアム・ユーザーに関する研究 — 北方民族博物館における調査から —」(『北海道立北方民族博物館研究紀要』第6号, 1997, pp. 69-112), p. 85。
- (33) 北海道開拓記念館, 北海道平取町立二風谷アイヌ文化博物館, 財団法人アイヌ民族博物館, 萱野茂二風谷アイヌ資料館。
- (34) 2002. 10. 1 北海道平取町立二風谷アイヌ文化博物館にて同館学芸員吉原秀喜氏へのインタビューによる。
- (35) 2002. 10. 5 北海道開拓記念館にて同館学芸員出利葉浩司氏へのインタビューによる。
- (36) 伊藤寿朗「地域博物館論」(長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店, 1986, p. 233-296), p. 262。この分類は1976年に開館した平塚市博物館が地域型に対抗する概念として中央型・観光型を提示したことによる。地域指向型は生活課題を軸に資料と人間との関係の実体的な相互の規定性や媒介性を課題としてそこに価値を見出すことが中心となる。中央志向型では法則や法則性を軸に資料と人間との関係の一般性・共通性を課題としてそこに価値を見出すとするものである。
- (37) 同上。
- (38) 伊藤寿朗『市民の中の博物館』吉川弘文館, 1993, p. 176。
- (39) 川森博司「現代日本における観光と地域社会 — ふるさと観光の担い手たち —」(『民族学研究』66(1), 日本民族学会, 2001, p. 68-84), p. 80。
- (40) 瀧端真理子によれば地域博物館論とエコミュージアム論は比較照合して論じられるべき価値があるとしている(「大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討(2) — 長居公園移転以降 —」(『博物館学雑誌』第28巻第2号, 全日本博物館学会, 2003, pp. 1-22), pp. 17-18)。
- (41) 拙稿「エコミュージアムに関する一考察 北海道における「伝統的生活空間の再生」を博物館として捉えられるか」(『早稲田大学教育学会紀要』第5号, 早稲田大学教育学会, 2004, pp. 52-59)。
- (42) Rivière, Georges Henri “The ecomuseum — an evolutive definition” (*Museum*, 148, Unesco, 1985, pp. 182-183)。ただしこの定義には “finalized in January 1980” と注記されている。
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*
- (45) 白老町住民と北海道ウタリ協会白老支部支部員(1998年実施), 門別支部支部員(1999年実施)を対象に行われた調査によれば観光業に従事しているアイヌ民族は3.7%に過ぎない(江川直子・松本和良編『ア

- イヌ民族とエスニシティーの社会学』学文社, 2001, p. 253-305)。
- (46) 大塚和義「アイヌにおける観光の役割 同化政策と観光政策の相克」(石森秀三編『観光の二〇世紀』ドメ
ス出版, 1996, p. 101-122), p. 113。